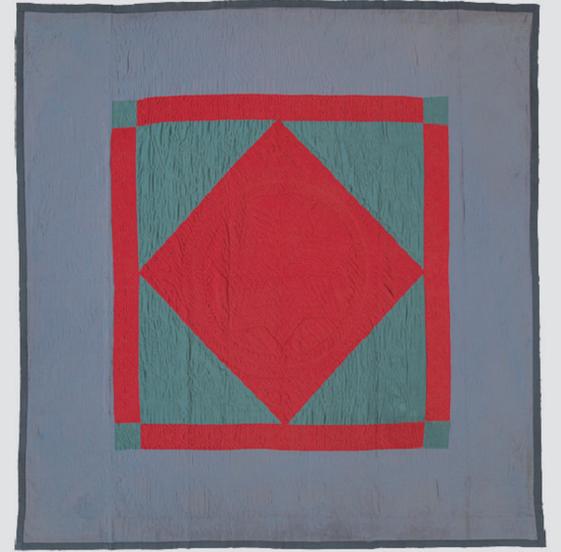


月刊 **みんぱく**
2018 6 月号

特集

アーミツシユの
生活と文化



そこに暮らし、そして世界に生きる人びと 鈴木七美
アーミツシユの信仰と生活 踊共二
アーミツシユのライフスタイル 大藪千穂
進化する伝統・多様化する社会 野村奈央
再洗礼派のなかのアーミツシユ 中朋美

キルトと私の出会い

黒羽志寿子

プロフィール
1938年山口県生まれ。1975年アメリカ在住中にキルトに出会う。帰国後全国でキルトサークルを主宰。藍染や更紗などの日本の布を使った作品が国内外で高く評価される。「黒羽志寿子のキルト藍と更紗」(日本ヴォーグ社)をはじめ、最新刊として「Pieces of my life」(OJUN Books、英仏語版)がある他、30冊を超える著書がある。

特派員の妻として、二人の子供たちとアメリカに渡ったのが一九七五年、私が満三八歳の時です。渡米四日目にキルトに出会ったのですが、それが人生を変えるなんて思いもよらないことでした。

英語も車の運転も出来ない私を、近所の別の社の奥さんがショッピングモールに連れて行つて下さり、その一角にある出来たばかりのキルトショップへついでのように立ち寄ったのです。初めて見たキルトは、一五〇年も前に作られ、掛け布団(ベッドカバー)として使われたものというものでした。

何?何?と、所々シミのある色褪せたそのキルトに近寄ると、店主が広げて私の手に持たせてくれました。小さな直角三角形で、たくさんの色柄が使われ、中には一枚の三角形に継ぎめがある物もあります。私が不思議に思ったのはそれだけではなく、布団の一面にやさしい影を作っている針目にも心を奪われたのです。キルトの端を持った私の体はジーンとして、胸はドキドキしていました。

その針目は飾りではなく、布団を丸洗いしても中綿が寄ったり、千切れたりしない為のものだと聞かされ、「何という知恵!」と感動は一気に高まり、「私もキルトを作りたい」と、その場で針・糸・布と当座必要な材料を買って帰り、翌日から基本

のパターンの四角つなぎを縫い始めました。家庭科の宿題は一度も出来上がった事がない私ですが、そのクッションカバーのトップ(表地)は一日で縫いしました。

早く綿をはさんであの影絵の様なキルティングというものがしたくて、二歳の娘の布団は人形のパターンと、鳥の羽根をイメージしたキルティングのデザインとの組み合わせで作りました。

ある時、幼稚園にかよっていた息子がクラスの女の子のバースデーパーティーに呼ばれました。さて、プレゼントはと考え、娘のキルトのパターンをポシェットにして作り持たせたところ、大評判となり、クラス中の女の子に作るはめになりました。おかげで早くアメリカの生活にも馴染め、キルトの腕も上がりました。

その後、ギルドの集会(キルターの集まる組合)でアーミッシュ・キルトに出会い、再び大きな衝撃を受けました。無地の布が織りなす大胆でシンパルな作品に心揺さぶられたのは、団十郎茶と黒を組み合わせた歌舞伎の定式幕の様な日本の粹に繋がっていると感じたからです。その時のドキドキを胸に抱えて帰国した二作目は、アーミッシュの影響を強く受けたものになりました。

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
創造界の化物僧
香川 雅信

16 新世紀ミュージアム
国立台湾大学人類学博物館
野林 厚志

18 シネ倶楽部 M
「お前はモロヘイヤ好きで、俺はナダが好き。それだけだ」
——「ヤギのアリーとイブラヒム」
相島 葉月

20 ながなんぢや
あなたの名前はどこですか?
福井 栄二郎

21 次号予告・編集後記

1 エッセイ 千字文

キルトと私の出会い
黒羽 志寿子

特集 アーミッシュの生活と文化

2 そこに暮らし、そして世界に生きる人びと
——アーミッシュ・キルトから考える
鈴木 七美

4 アーミッシュの信仰と生活
——ヨーロッパ文化の古層
踊 共二

5 アーミッシュのライフスタイル
大藪 千穂

7 進化する伝統・多様化する社会
野村 奈央

8 再洗礼派のなかのアーミッシュ
中 朋美

10 ○○してみました世界のフィールド
民衆宗教の世界観を歩く
石原 和

月刊
みんぱく

6月号目次

アーミッシュの生活と文化

そこに暮らし、
そして世界に生きる人びと
——アーミッシュ・キルトから考える

鈴木七美 民博グローバル現象研究部

米国コミュニティへの旅——オルタナティブな暮らしの模索

わたしが初めてアーミッシュに出会ったのは、医療の近代化に抗しふつうの人びとの癒しの伝統を謳った一九世紀民衆健康運動を追っていた、一九九〇年のことである。ペンシルヴェニア州の幹線を走る馬車を目にしたときの驚きは忘れられない。その後、一九九七年から学生研修にかかわるようになったわたしは、一五世紀フス派の流れをくむモラヴィア教徒を訪ねた。彼らの祖先は、宗教的寛容で知られるペンシルヴェニア州に移住後、南部ノースカロライナ州を目指し、植生、風土病に適切な治療、呪術、食養生、そしてヨーロッパ由来の薬用植物について、先住民やアフリカン・アメリカンなどの地域住民と精神的に情報交換した。わたしは治療所とタヴァーン（食事を提供する小さな宿）を外の世界との交流地としたコミュニティ構想の記録に惹きつけられた。だが、

なかった再洗礼派は、新旧キリスト諸派や世俗権力から危険視・迫害されて、殉教したものもいるが、多くが北米に移動した。

メノナイト歴史協会からの紹介で学生研修に加わってくれたエイダは、アーミッシュ・メノナイトだと自己紹介した。オルドオーダー・アーミッシュの家庭で育ち洗礼を受けて結婚したが、厳しいシャニングのきまりなどに疑問をもち、夫とともに教会から離れた。シャニングの対象となったエイダがもつとも辛かったことは病気の家族を見舞うこともできなかったことだという。

一九世紀半ば以降の社会変化のなかで、アーミッシュのあいだでも礼拝の場所や使用言語、服装、シャニングなどに関するきまりが議論され、改革派のアーミッシュ・メノナイトが分離した。一九二〇年代には自動車、公共の電気や電話を利用するピーチー・アーミッシュがあらわれた。そうした変化のなかで、保守的なオルドオーダー・アーミッシュは学校教育を八年生までに制限するなど、一般社会との軋轢を経験してきた。信念に基づく生活を求めて移動を辞さないオルドオーダーだが、近年その人口は増加傾向にあり、一般社会からの参加も含め、米国三州、カナダ三州、そして南米アルゼンチン、ボリビアに三万人を超える人びとが暮らしている（二〇一七年六月現在）。

キルトが織り上げる世界

オルドオーダー・アーミッシュとエイダの会話を聞いてみると、それぞれ異なる生活実践を選択している彼らだが、手作りしたものを合わせ合せて楽しみ、語り合う時間をゆったりもつなど共通の価値観をもっていくことが感じられた。「伝道はしないが、暮らして



サンシャイン・アンド・シャドウパターンのベッドカバー。苦楽ある人生をともにしてほしいという息子夫婦への願いを込めて製作されたという（製作：1972年、ペンシルヴェニア州。H0269520）



ベッドカバー
ログキャビンパターンのなかでも、バーンレイジング・コンフィグレーションとよばれるもの。「ともに納屋を棟上げする」という意味（製作：1921年ごろ、インディアナ州。H0279282）

学生たちは、玄関にモラヴィアの星を下げ、信者の平等を表現した小さい平らな墓を使い続けるモラヴィア教徒の歴史のみならず、現在も世俗から明確に距離を置いて暮らしているアーミッシュを訪ねてみたいと希望した。

生活様式への選択

アーミッシュは、幼児洗礼が一般的であった宗教改革の時期に、自分で聖書を読み信仰を確信した成人が洗礼を受けることを主張し、スイスやドイツを中心に活動を始めたキリスト教再洗礼派（アナバプティスト）の一派である。

聖餐式や洗足、服装のきまり、信条を違えるメンバーへの一切の交流を断つシャニング（社会的忌避）の徹底を主張したスイス農村出身のヤーコブ・アマンに率いられた厳格派のアーミッシュは、一七世紀末にメノナイトから分離した。国家・地域や教会など既存の境界にとらわれず、無抵抗・非暴力を貫き徴兵にも応じ

信念を表現する」というオルドオーダー・アーミッシュのシンボルのひとつが華美な装飾を避けた簡素な行まいである。主として無地の布を利用してベッドカバーなど生活用品として作られたキルトは、思いがけない色を組み合わせた幾何学的なデザインで一九七〇年代以降注目を集めた。端切れでも布を十全に生かすことは一般のアメリカン・キルトにも共通で、布を組み合わせたパッチワークが自然や生活を生き生きと描き出している。多くの人びとに愛されたログキャビン（丸太小屋）・パターンは、社会保障に頼らず相互扶助を重視しみんなを納屋を棟上げるアーミッシュのキルトにも表現されている。

人生のさまざまな機会に贈られるキルトには、謙遜を信条とするアーミッシュもイニシャルや年月を縫い込む。共通の目的に向けた募金用キルト作りは一般社会と同様、アーミッシュのあいだでも盛んである。集まってキルトを仕上げるキルティング・ビーや、オークションへの参加は、豊かな交流の時間を人びとに与えてきた。

一九八〇年代以降、情報を記録するキルト・ドキュメンテーション活動が米国で広がりはじめた。大切にしまってきた母親からの結婚祝いのキルト（上資料）を民博に譲ってくれた六十代のアーミッシュも、キルトに込められた気持ちを伝えたいと考えたのかもしれない。キルトは、一般社会から距離を保ち現代社会における生き方を模索する人びとが、さまざまな交流をとおして世界を織り上げることに参加してきた道を照らし出している。

まもなく開幕の企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」。本号ではそれと連動し、日本ではまだあまり知られていないアーミッシュの歴史や文化、生活を紹介します。ぜひ本号を片手に、本館のキルト・コレクションをご覧いただきたい。

会期◇六月二一日「木」—九月一八日「火」
場所◇本館企画展示場



新天地での開拓者の生活を感じさせるというベアズ・ポー・パターンの子ども用ベッドカバー（製作：1910年代、アイオワ州。H0279288）



オルドオーダー・アーミッシュのキルティング・ビー。パッチワークした表布、中綿、裏布の三層を合わせるキルティングをともにおこなう（カンザス州オーダー、2009年）



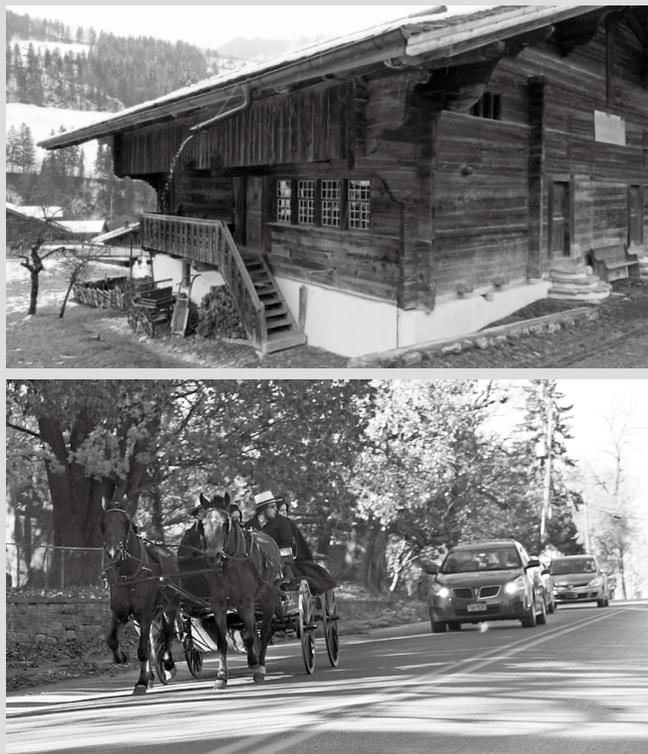
インディアナ州など中西部のアーミッシュ・キルトとその情報から構成される「ポットインジャーコレクション」とキルト・ドキュメンテーション活動の検討（インディアナ州立博物館、2016年、撮影：鈴木公二）

アーミツシュの信仰と生活

——ヨーロッパ文化の古層

踊 共二 武蔵大学教授

アーミツシュは二六世紀前半、宗教改革時代のスイスやドイツにあらわれた再洗礼派の流れを汲む。最初の指導者ヤコブ・アマンはスイスの故郷を去ってアルザス地方で亡命生活を送ったが、スイス・ドイツ・フランスに散在する仲間たちをしばしば訪ねて結束をうながした。一八世紀前半にはアーミツシュの北米移民が増加する。その旅を助けたのはオランダのメノナイトたちであった。ヨーロッパ（ドイツ）に残った最後のアーミツシュは一九三七年にメノナイトに吸収され、その長い歴史に幕を閉じる。一方、北米に渡ったアーミツシュは独自性を失わず、三世紀にわたって存続している。



上：アマンの出身地、山深いエルレンバッハ村の古民家（スイス・ベルン州、2017年）
下：アーミツシュの馬車（ペンシルヴェニア州ランカスター郡、2012年）

位のシンプルライフを維持するためである。教育は自前のワンルームスクールでおこなう。彼らの多くは今では近代医学を受け入れるが、かつてはどの集落にも民間治療師がいた。その医師はドイツ語で「ブラウヘ」（習わし）というが、アメリカ先住民の慣習との類似ゆえに「パウワウ」（呪術、呪術師、踊りの集会などを意味する先住民のことば）とも称される。治療師は祈りと呪文を唱え、手をかざして病を癒す。そのわざは口伝によって継承されてきたが、内容的にはドイツ・スイスの治療師たちのそれと驚くほど似ている。治療師たちは薬草も使う。薬草・シロップの製法は一般家庭でも受け継がれており、古い家には手書きのレシピが大量に残っている。現代アーミツシュの指導者たちは「パウワウ」に批判的であり、その伝統はすでに途絶えたと説く研究者もいる。しかし最近の人類学的調査によれば、この古い医師は地下水脈のように残っており、代替医療の一種にもなっている。

フラクトウア、キルト、書籍文化

アーミツシュの社会にはヨーロッパの古い民衆文化が残っている。ただし彼らは華美を嫌うため、すべてが抑制的である。フラクトウアとよばれるドイツ語のカリグラフィは素朴な花鳥模様を伴っており、製作者たちの出自を容易に推測させる。フラクトウアは婚姻証明書、家の祝福（神の加護を願うポスター）、蔵書票、金言集（ABCの歌）

など、多くの印刷物や手書きの文書に用いられている。色彩は鮮やかだが、独特の深みがある。キルト製作はアーミツシュを含むドイツ系移民が北米で始めたものだが、そこにも古いヨーロッパのデザインが使われている。例えば星形の幾何学模様である。アーミツシュの書籍文化もドイツ的である。彼らは古いゴシック体を用いて本を作る。『アウスブント』というドイツ語の賛美歌集が典拠例である。これは一六世紀後半に編まれ、ケルンやバーゼルで印刷されたものだが、移民たちはこれをアメリカにもたらし、現地でも出版し続けた。

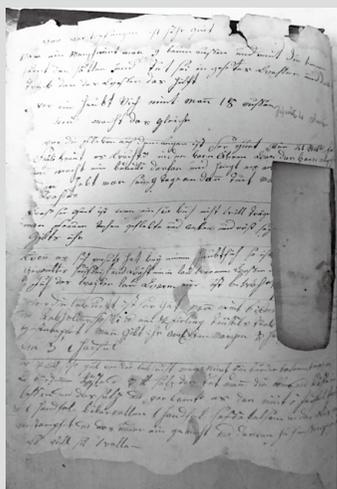


フラクトウアの蔵書票（19世紀）。アーミツシュ・メノナイト・ヘリテージセンター蔵（オハイオ州ホームズ郡）

コミュニティ、シンプルライフ、民間医療

米国やカナダに約三万人いるアーミツシュは保守派と進歩派に大別されるが、保守的なグループほど、すべてを小さい共同体の内部で完結させようとする。自動車を所有せず、馬車を使うのは、ゆっくり流れる時間のなかでコミュニティ単

アーミツシュは旧約聖書に由来する「寄留の民」としての自覚ゆえに一般のアメリカ人のような国民意識をもたず、星条旗に向かっておこなうべき「忠誠の誓い」も忌避する。彼らは英語を母語としないエスニックマイノリティだが、ヨーロッパの故郷に愛着をもつてはいない。しかし興味深いことに、彼らは先祖伝来の信仰を保つなかで、たとえ意識していなくても、ヨーロッパではすでに失われたか、あるいは失われつつある文化の古層を保っている。



古い聖書のブランページにメモされた薬草のレシピ（オハイオ州ホームズ郡のアーミツシュの家庭にて）

アーミツシュのライフスタイル

大 千 穂 岐阜大学教授

信仰に基づく簡素な生活

アーミツシュのライフスタイルの基盤は、第一に信仰に基づいた農業を主とする簡素な生活にある。彼らは再洗礼派であり、オールドスング（秩序・規則）という生活を規定し口伝で伝承する独自のルール集をもち、これに忠実であるが、違反した場合、シャニングを受ける。シャニングは、「世俗的」なものを排除するシステムで、「世俗的」なものとは、快適さの追求、物質的なものへの愛情、名前を出した芸術作品の制作など自己を高める活動がある。第二に、教区と家族による相互扶助のコミュニティがあげられる。納屋の建築、結婚式、葬式

特徴的なライフスタイル

彼らのライフスタイルで特徴的なものは、オールドスングで定められている。衣服は、男性は白いシャツ、黒のつりズボン、黒の帽子が正装で、ボタンの代わりにフックが付いている。成人洗礼を受けるとあごひげをのばし出す。女性の正装は、単色のドレス、白のケープとエプロンである。髪の毛は一生切らず、真ん中でわけて、丸めて後ろでピンで留めている。

言語は、ペンシルヴェニア・ダッチとよばれるドイツ語に近いことばを話す、

小学校から英語を学び始める。英語は外部の人とのやりとり、ドイツ語は神聖なものを読み書きに、ペンシルヴェニア・ダッチは家族やコミュニティで使用と、言語の利用を区別している。また、結婚はアーミッシュ同士と決められており、結婚するためには洗礼を受けなければならない。交通に関しては、バギー（馬車）やキックボードの利用が主で、車の所有や運転は禁じられている。トラクターの利用は制限されており、馬を農作業に用いることで、機械が人間にとって代わらないよう、人手が必要な状況をわざわざ作り出している。

さらに外の世界との分離については、電気の制限的利用を実践している。電源からの電気、コンピュータ、テレビ、ラジオの所有を禁じ、電気そのものではなく、電気が運んでくる情報を制限している。利用できるのは二ボルトの直流である。電話の選択の利用も外部の世界との分離を象徴している。家のなかに電話を設置せず、コミュニティ電話を数家族共通で利用している。ただし近年、携帯電話の影響もあらわれ始めている。また税金は払っているが、社会保障を受けることを拒否することで、相互扶助の原則を保守している。



上：アーミッシュの学校。通常、通りから少し離れた場所に建てられている。屋根の上にはベル。左手のふたつの小屋はトイレ（2009年）
下：学校の内部。小さい子どもはいちばん前の小さい机に座る。黒板上に貼られたアルファベットを見ながら英語を学ぶ（2008年）

アーミッシュの教育

彼らは八年生までの学校教育のみを許可しており、それは読み・書き・そろばん（3R: Reading, Writing, Arithmetic）が基本となる、一学級制の実践的基礎教育である。アーミッシュの独身女性が教師を勤めることが多く、学校を経営するのはアーミッシュ・コミュニティである。高等教育を受けることは禁じられており、シャニングの対象となる。ただし学校だけでなく家庭教育も彼らにとって重要な意味をもっている。

アーミッシュは、洗礼を受ける前の若者をアーミッシュとして認めていないが、若者の九五パーセントは洗礼を受ける。このため大人たちは若者の反抗的な行動を大目に見ている。洗礼を受けないということは、その後の生活で、家族や友人、コミュニティと限定的にしか関係をもてなくなることを意味する。それまでアーミッシュとして育てられ、八年生までの教育しか受けていない若者にとって、アーミッシュ・コミュニティを離れて生活することは、かなりの困難を意味する。そのため、若いころの放蕩は、見かけ上の選択の自由ともとれる。



上：アーミッシュの家。電気を使わないので電線は見当たらない。風車も動力源のひとつとして利用されている。真ん中にある塔はトウモロコシを貯蔵するサイロ（2013年）
下：Mud Sale（マッドセール：春先の農業祭り）での若いアーミッシュの男の子たち（2008年）

進化する伝統・多様化する社会

野村 奈央
埼玉大学准教授

生活用品から美術品へ

多くのミュージアムに所蔵される、無名のアーミッシュの女性たちが何十年も前に作ったキルトは、彼／彼女らの衣服と同じような暗い色調の無地の生地でパッチワークされた幾何学的なデザインのものが多い。アーミッシュ・キルトが今日高く評価されるようになったきっかけは、一九六〇年代末から一九七〇年代にさかのぼる。骨董商や美術収集家によって「発見」されたアーミッシュ・キルトは、抽象的なモダンアートと比較され、展示や雑誌などを通じて広まっていった。さらに「アーミッシュはキルトを作る」という短絡的な理解が世間に定着するにつれ、アーミッシュ・コミュニティでも観光客向けのキルト産業が発展し、アーミッシュの伝統的なキルトとは異なる大衆向けのデザインも作られるようになった。こうして、「アーミッシュ女性」と「キルト」が強固に結び付けられるようになったのだ。



アーミッシュの女性が購入したキルトトップ。柄物の生地を使用し、四隅を小さな正方形の生地パッチワークしているところに現代の影響が見られる

ミッシュ・キルトは、抽象的なモダンアートと比較され、展示や雑誌などを通じて広まっていった。さらに「アーミッシュはキルトを作る」という短絡的な理解が世間に定着するにつれ、アーミッシュ・コミュニティでも観光客向けのキルト産業が発展し、アーミッシュの伝統的なキルトとは異なる大衆向けのデザインも作られるようになった。こうして、「アーミッシュ女性」と「キルト」が強固に結び付けられるようになったのだ。

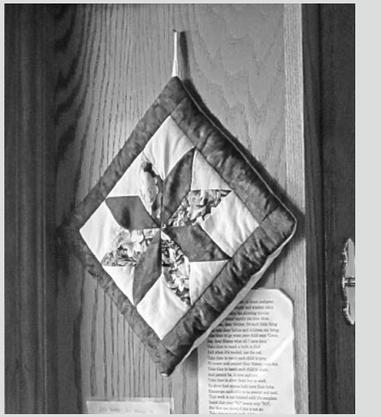
近代化するアーミッシュ・キルト

キルト産業は観光地化の流れに乗り、多くのアーミッシュの女性が携わって発展してきた。現在でもアーミッシュ・コミュニティには、自宅の一部を店舗に改装したキルトショップが多数存在するが、そこでは主流アメリカ社会で消費されるキルトと何ら変わらない、柄物の生地を使用したカラフルなデザインの世俗的なキルトが当たり前のように売られている。アーミッシュ・キルトの伝統に対するイメージと、実態のズレに関心をいだいたわたしは、一〇カ月ほどペンシルヴェニア州ランカスター郡にあるアーミッシュの家庭に滞在し、生活をともにしながら現地調査をおこなった。

小さな子どもをもつ母親たちは「内職でキルトの壁掛けを作ることはあるけれど、子どもたちはまだ結婚する年齢ではないから、大きなキルトは作ったことがない」、「キルトを作るよりも、洋服を作る方が好き」などと話してくれられた。結婚祝いとしてもらった花柄の生地で縫われたログキャビンのキルト（下写真）を見せてくれた女性は「このキルトは、メノナイトが経営する雑貨屋でわたしが選んだキルトトップ（表布）を母がキルティングしてくれたもの」と語った。結婚を控えた子どもをもつ母親は、黒、白、赤を基調としたモダンな配色の作りかけのキルトを見せながら「息子がこ



結婚から20年以上たち、何度も洗濯されて柔らかい風合いになったキルトは、色褪せてしまった今でも大切に使われている



アーミッシュの家庭でも使用される、観光客向けに販売されているパッチワークの鍋つかみ

アーミッシュ女性の姿は、あくまでも彼女たちの生活の一面に過ぎない。キルトを結婚祝い品の品として贈るといった伝統が残っている一方で、キルト作りを好む者、好まない者、自ら使うためにキルトを作る者、観光客向けの商売として作る者など、キルトとのかかわり方は多様化しているのだ。

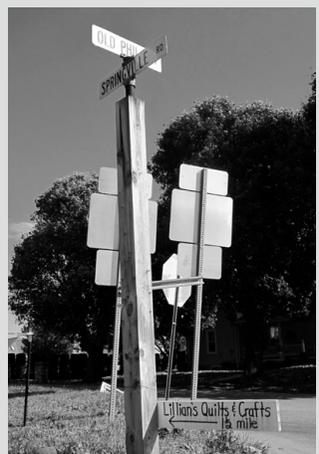
のスターのデザインを気に入ったから、注文をして作ってもらった。わたしはキルティングは好きだけれど、パッチワークはあまり得意じゃなくて。これから娘と一緒にキルティングをするのが楽しみ」と教えてくれた。

このように、世間一般に想像されるようなキルト作りに動

伝統のゆくえ

観光客向けの世俗的なデザインのキルトは、現在では多くのアーミッシュが消費し、家庭用のデザインにも大きな影響を与えるようになった。観光客は、一見、牧歌的で前近代的に見えるアーミッシュ・コミュニティでの体験を具現化する媒体としてのキルトを消費しているのかもしれないが、アーミッシュの家庭で使用されているキルトが、必ずしもアーミッシュの伝統を象徴するものとは限らない。

アーミッシュ文化は、変化のない、静的なものではない。キルトの伝統は、外部の人間を対象としたキルト産業の恩恵を受けながら、持続し、また強化されているともとらえられるのではないだろうか。



アーミッシュ・キルト店の手書き看板

再洗礼派のなかのアーミッシュ

中朋美 鳥取大学准教授

アーミッシュが住む地域には、彼らの生活やキルトといったクラフトなどに魅せられた人びとが、毎年、世界中から大勢訪れている。わたしもその一人で、一九九八年の夏に初めてペンシルヴェニア州のランカスターを訪れた。実際に訪問して気づいたのは、彼らの生活は決してほかの人びとと隔絶したものではないということだ。例えばアーミッシュの生活などを説明する施設では、彼らと同じキルトをもつ再洗礼派というグループの人びとと出会うことも多い。再洗礼

アーミッシュのほかにも、再洗礼派に属するグループはたくさんある。それらは同じキルトをもちつつも、宗教的解釈を日々の生活に反映する方法が異なる。例えば、ハテライトというグループは、共同で日々の生活を送り、農産物の生産などで生計を立てている。これに対しアーミッシュは、宗教共同体の存在を尊重しながらも、個人の生活を基本とする。また各グループ内の多様性もあり、例えばアーミッシュと同様に家族単位での生活を基礎とするメノナイトとよばれるグループには、車を所有せず、馬車を使うサブグループがあれば、服装や生活スタイルに対する教会の決まりが少ないものもある。

アーミッシュとずいぶん異なって見える場合もあるが、どのグループもキルトは共通であるため、宗教的な考え方は基本的に類似している。そのため、アーミッシュとほかの再洗礼派のグループのあいだには、さまざまなつながりがあり、逆にいえば、再洗礼派とのかかわりを考えることで、アーミッシュの社会や生活についての理解が深まることもある。



上：アーミッシュとメノナイトがともに働く屋外物置の製造・販売会社 (ペンシルヴェニア州、2016年)
下：保守派メノナイトの出版社に作られた図書室。ここでは再洗礼派関連の書籍も閲覧・貸出が可能 (ペンシルヴェニア州、2015年)

派とアーミッシュの関係を理解することで、アーミッシュやその生活について別の観点から考えることもできる。

再洗礼派

アーミッシュの宗教的なルーツは一六世紀のヨーロッパの宗教改革時にさかのぼることができる。当時、キリスト教の信仰のあり方を見直そうとするさまざまな動きが起こった。アーミッシュはそこで登場した再洗礼派の流れを受け継いでいる。再洗礼派という名前の由来は、信者となるかならないかの判断は、その重要性から自覚をもって判断できる大人がしなければならず、当時広くおこなわれていた幼児洗礼の宗教的な意味を否定し、希望した大人に洗礼をおこなったことと関連する。



上：保守派メノナイトが経営する店の様子 (マサチューセッツ州、2015年)
下：メノナイトが経営するベーカリーの一部。アーミッシュ関連商品も販売されている (テキサス州、2018年)

グループを越えての協力

再洗礼派の人びとは、ときにはアーミッシュとほかの人びととのスムーズな関係づくりを手助けする、いわばアーミッシュと周囲の社会との架け橋のような役割をすることもある。アーミッシュのなかには、自分たちの信仰や日常生活について語ることを躊躇する人びともいる。そんななか、例えばランカスターにあるメノナイト・インフォメーションセンターでは、アーミッシュの農場や店を訪問できる、解説付きのツアーを提供している。またアーミッシュ側も、メノナイトが経営する店に自分たちの製品を置き、ビジネスの機会を広げている。

このほかにもアーミッシュのなかには、メノナイトと協力して災害等で困っている人びとを援助しているものもある。メノナイトのもつ全国的な災害援助ネットワーク (例えばメノナイト・ディザスター・サービス) は、信仰に配慮した環境下での支援活動の場をアーミッシュにも提供している。またアーミッシュのなかでも車を使用するグループのなかには、海外での孤児や寡婦への援助等を保守派のメノナイトなどと協力しておこなっているものもある。こうしたつながりや関係のなかで、アーミッシュの独特の生活は繰り返り広げられている。

民衆宗教の世界観を歩く

いしはら やまと
石原 和
民博 プロジェクト研究員



宗教都市、名古屋を歴史散歩してきました
如来教御本元・青大悲寺と筆者。
如来教教祖喜之はこの地に生まれたという

寺社数が日本でもっとも多い都道府県はどこか——。じつは清水寺や伏見稲荷のある京都府でも東大寺のある奈良県でもない。意外なことに愛知県なのだ。けれども、名古屋で生まれ育った筆者にとって、この順位はあまりピンとこない。そこで、その“宗教都市”ぶりを、江戸時代後期の名古屋城下に住む人びとのなかから登場した如来教を手がかりに探ってみることとした。



東別院。1805年に始まる再建の際には、名古屋周辺の諸藩から人びとが奉仕のために集まり、非常に賑わった（写真はすべて2018年に撮影）



円通寺秋葉堂。如来教でも火まつり当日にこれに関する説教が開催された記録がある



熱田金刀比羅神社。青大悲寺から歩いて10分ほどの距離にある。この小社も往時は現在よりも広い社域を有していたという



への玄関口であったが、ここを実際に歩いてみるとこの地が宗教的な空気に包まれた場所であったことに改めて気づかされる。熱田神宮を東へ抜け、大津通を南に下ると右手に円通寺が見えてくる。この寺院は火防の利益をもつ秋葉大権現の信仰で知られており、現在も毎年二月一日に火まつりがおこなわれている。この秋葉信仰が名古屋で急速に広がっていったのも一八〇〇年前後のことであった。なかでも、名古屋での拠点であるこの円通寺は信者の急激な増加に伴い、拡大再建をおこなうほどであったという。わたしが立ち寄った日は、風が強く、ひどく乾燥した日であったから、当時であれば、多くの人が火事が起こらぬよう祈願していたことだろう。円通寺を出て大津通をしばらく北上すると東別院（真宗大谷派名古屋別院）がある。如来教が開教したのはこの寺院の拡大再建の時期にあたり、多いとき

名古屋市営地下鉄・名城線、西高蔵駅を出てすぐの築地堀に沿って歩くと、尾張六地蔵のひとつに数えられる鉄地蔵がある。この鉄地蔵がある寺院こそ、如来教の御本元・青大悲寺である。鉄地蔵をとり過ぎ、山門から境内に入ると、苔むした緑の庭園と茶色くこけた本堂・庫裡に囲まれて白く目立つ金毘羅堂を臨むことができる。一八〇二年八月一日、この場所で元武家奉公人の喜之が雪隠（トイ）に籠っていたとき、靈感に襲われ、口から自然にことばがあふれた。これが如来教の始まりだとされる。当時四七歳の女性教祖、喜之が開いた善心の獲得による救済を説く信仰は、尾張藩士や名古屋城下の町人らに広まった。幕末には江戸城大奥へも広がったとも、戦前には信者二〇万人とも伝えられるが、現在は信者数を減らしている。

宗教都市、名古屋と如来教



名古屋市熱田区西高蔵駅周辺

こうした地域の神仏たちは如来教の世界のなかに登場する。喜之の在世期、如来教の信仰生活の中心にあったのは御日待とよばれる喜之の説教で、信者や喜之の自宅が開かれた。ここでは、信者の願いに対して、神がかりした喜之がそれに応答していくというスタイルがとられた。如来教の説教では、先に見た秋葉大権現や浄土真宗の宗祖親鸞などさまざまな神仏が喜之の体にくんだり、信者に語りかけている。そのなかでも、ほとんどの説教で喜之にくだったのは金毘羅大権現であった。如来教においては、金毘羅大権現は現世を生きる人びとを救済するために如来から遣わされた神として位置づけられた。秋葉や親鸞など他の神仏はこの金毘羅大権現を中心とした秩序のなかに再編成された。この他に、喜之のもとに集う人びとにとって身近であった熱田神宮の神や、知多半島の緒川の入海神社の入海大明神も喜之の神がかりの正統性を示す重要な場面で登場している。如来教には、名古屋・熱田を中心とした地域に根つき、一八〇〇年前後に盛り上がりを見せていた諸信仰の動向が強く反映されている。いいかえれば、僧侶や神職でない俗人であった喜之やその信者たちの、さまざまな神仏とかかわる信仰の感覚や生活のあり方が刻みこまれているのである。こうした意味で、如来教の世界観には“宗教都市”名古屋が凝縮されているといえよう。

熱田の寺社を歴史散歩
如来教は周辺地域の寺社の神仏と深くかかわり合いながら自らの世界観を創り上げていった。このことを念頭におきながら熱田地域を歴史散歩してみよう。青大悲寺から伏見通を南へ進んでいくと旗屋町の交差点に着く。この交差点からすぐのところは金刀比羅神社がある。金毘羅大権現がこの地にもたらされたのは一七七二年のことと伝えられている。この大通の脇に佇む小社は、一八〇〇年前後の全国的な金毘羅信仰ブームのなかで創建されたものと推測できる。この勧請年は、名古屋で金毘羅大権現三十三箇所という巡拝が整備されていく時期にあたり、宗教的高揚のなかで多くの人びとの信仰を集めていたと思われる。残念ながら、今やその名残を窺うことはできないが、喜之とその信者たちもそうした熱狂を肌を感じていたことだろう。金刀比羅神社の道路を挟んで向かい側には熱田神宮がある。この神社を中心としてこの地域には寺社や古墳が集中しており、荘厳な雰囲気醸し出している。熱田は東海道を行き来する人びとにとって名古屋城下

企画展

「アーミッシュ・キルトを訪ねて」そこに暮らしそして世界に生きる人びと」
無地の服を着て馬車を駆る北米のキリスト教再洗礼派アーミッシュが布の端切れを生かしてつくるキルトは、その鮮やかな色合いや細やかなステッチで人びとを惹きつけています。2011年より収集してきたみんなくコレクションを素材として、キルトに織りこまれた日々の暮らしや物語、キルトが結ぶ世界との交流をたどりま。

会期 6月21日(木)～9月18日(火)
会場 本館企画展示場

■関連イベント

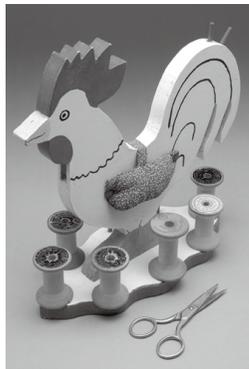
ワークショップ
「パッチワーク・キルトのある生活」
展示場でアーミッシュ・キルトを観察したあと、実際にパッチワークを体験します。パッチワークの技術をまなびながら、アーミッシュの人びとの生活や考え方にふれてみましょう。

日時 7月22日(日)
(午前の部)10時30分～12時(10時20分集合)
(午後の部)14時～15時30分(13時50分集合)
講師 黒羽志寿子(キルト作家)
鈴木七美(本館教授)

会場 本館第3セミナー室、企画展示場
対象 小学5年生以上
※要事前申込(応募者多数の場合抽選/定員各20名)、参加費500円(別途要展示観覧券)
※受付期間 6月21日(木)～7月2日(月)
夏休み子どもワークショップ
「キルト その世界の不思議を考える」
「フィールドワークに挑戦!」
自由研究はみんなくで解決! みんなくで1日研究者になって「フィールドワーク」を体験してみよう。

日時 7月29日(日)10時30分～16時(10時20分集合)
講師 鈴木七美(本館教授)
会場 本館展示場
対象 小学4年生～6年生
※要事前申込(先着順/定員12名、参加費500円)
※6月21日(木)応募受付開始

ギャラリートーク
日時 6月28日(木)、7月26日(木)、8月23日(木)、9月13日(木) 各日14時
講師 鈴木七美(本館教授)
会場 本館企画展示場
※申込不要、要展示観覧券



裁縫セット

みんなく映画会・第41回ワールドシネマ
「少女は自転車にのって」
明朗活発な10歳の少女ワジダの日常生活や願いをとおして、サウジアラビアにおける女性の状況について考えます。

日時 6月9日(土)13時30分～16時
(13時開場)
会場 本館講堂(定員450名)
※申込不要、要展示観覧券
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前に配布



© 2012, Razor Film Produktion GmbH, High Look Group, Rotana Studios All Rights Reserved.

音楽の祭日2018 in みんなく

1982年にフランスで、夏至の日にみんなくで音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまりました。みんなくでも、世界のさまざまな楽器を使って「音楽の祭日」を祝います。

日時 6月17日(日)10時15分～16時20分(10時開場)
会場 本館講堂、エントランスホール
※申込不要、参加無料(展示をご覧になる方は、展示観覧券が必要です)
※本イベントのみご覧になる方で、自然文化園(有料区域)を通行される場合は、同

園入園料が必要です。
お問い合わせ先
企画課「音楽の祭日」担当
06・6878・8210
(土日祝を除く9時～16時)

みんなくSamai Sama塾 塾生募集!
知的障がい者の方のための学習ワークショップを開催します。グローバル化が進む現代社会において、知的障がい者の方々も世界の文化や民族、そして多様な生き方や考え方を学ぶことは必要不可欠であると考えています。世界の文化を知ることによって、より楽しく豊かな生活を送っていたきたいと思っています。

対象 中学生以上の知的障がいのある方(療育手帳を持っている方)
活動場所 国立民族学博物館
※参加無料
※参加希望の方は、まずはみんなくSamai Sama塾へ登録ください。
※ワークショップに参加する塾生には、必ず保護者もしくは介護者の方が付き添ってください。
※受付期間 8月31日(金)まで
※詳しくはみんなくホームページをご覧ください。

みんなくミュージアムパートナーズ(MMP)「点字体験ワークショップ」
目で読む文字から手で読む文字へ、点字で異文化コミュニケーション! 点字体験ワークショップを開催します。

日時 6月9日(土) 12時～15時30分
会場 本館エントランスホール
※申込不要、参加無料
※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

みんなくゼミナール

日時 6月16日(土)13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
第481回
データベースのはじこ
講師 山本泰則(本館准教授)



みんなくのデータベースを横断検索した結果

みんなくワークショップ・サロン
研究者(話者)

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんなくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

6月3日(日)14時30分～15時 本館ナビひろば
みんなくの元気なボランティア
——MMPとみんなく——
話者 出口正之(本館教授)

6月10日(日)14時30分～15時15分 本館ナビひろば
亜麻草笥の世界
話者 森明子(本館教授)

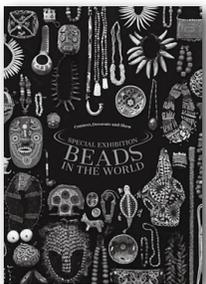
6月24日(日)14時30分～15時30分 本館企画展示場
キルト・ストーリーが紡ぐ世界
話者 鈴木七美(本館教授)

※6月17日(日)のワークショップ・サロンはお休みです。
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

刊行物紹介

■池谷 和信 編
『Beads in the World』
国立民族学博物館 2,400円(税別)

開館40周年記念特別展「ピース——つなぐ・かざる・みせる」図録の英語版。
本書では、ピースの誕生から現代までの10万年という歴史、日本を含めた地球の隅々までの空間を視野に入れて、素材も見た目も多種多様な世界各地のピースを紹介する。



■岸上 伸啓 編著
『はじめて学ぶ文化人類学——人物・古典・名著からの誘い』
ミネルヴァ書房 2,800円(税別)

19世紀後半から現在まで150年に及ぶ文化人類学の展開の軌跡を、主要な研究者の生涯と業績・著作に焦点を当て読み解く。文化人類学の初学者にも最適な入門テキスト。古典から最新の研究動向までカバーし、人類学の大きな学問潮流を捉える道案内(ガイド)を提供する。



友の会

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomoto@senri-f.or.jp

友の会講演会

会場 本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)
※会員無料(会員証提示)、一般5000円

第479回(7月7日(土)13時30分～14時40分)
[第92回民族学研修の旅関連]
ヒンドゥー教祭礼の読み解き方
講師 三尾稔(本館教授)

第480回(8月4日(土)13時30分～14時40分)
企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて」
——そこに暮らし、そして世界に生きる人びとと関連——
アーミッシュの信仰と文化——歴史から現代へ——
講師 踊共(二武蔵大学教授)

東京講演会

会場 モンベル渋谷店5Fサロン(申込先着順・定員60名)
※会員無料(会員証提示)、一般5000円

第123回(6月23日(土)13時30分～14時40分)
[第92回民族学研修の旅関連]
ヒンドゥー教祭礼の読み解き方
講師 三尾稔(本館教授)

第92回民族学研修の旅

融合と共存の北西インドをゆく
——女神信仰とインド叙事詩の祭礼の期間に訪ねる日程——
10月13日(土)～22日(月) [10日間]

第79回体験セミナー

富士山 信仰の世界
日程 8月26日(日)～27日(月)



想像界の生物相

創造界の化物僧

兵庫県立歴史博物館学芸課長 香川 雅信 かがわ まさのぶ



資料名 | 大入道山車の張子人形

標本番号 | 右から H0065362、H0065363

地域 | 日本、三重県

サイズ | 右から 高さ 29cm、19cm

◆◆四日市祭のオニウドウサン◆◆

三重県四日市の鎮守・諏訪神社の秋の祭礼「四日市祭」には、「オニウドウサン」とよばれる、「大入道」の山車が登場する。日本でもっとも大きなからくり人形の山車とされ、全高約九メートル、S字形に伸びる首の長さは二・七メートル。もともとは文化二（一八〇五）年に名古屋の人形師に作らせたものとされ、明治二（一八六九）年にクジラのヒゲを用いたバネによってS字形に首が伸びる仕掛けが加えられたという。

伝承によれば、むかし、醤油屋の土蔵に古狸が棲みつき、大入道に化けて人びとを脅かしたので、それに対抗するため大入道を模したからくり人形を作り、背の高さ比で狸を負かしてみごと退散させたとされている。たとえていうならゴジラに対してメカゴジラを作って対抗したようなもので、いわば江戸時代の巨大ロボットである。

この四日市祭の大入道は郷土玩具の題材となっており、よく知られているのは簡単なからくりのある紙人形で、大入道の首が伸びたり、舌が伸びたり、目の表情が変わったりする。一方、民博の所蔵品になっっているのは張子製の立体的な模型で、

やはり首や舌が伸びたりする同様の仕掛けがある。張子の方は現在は製作されていないが、紙人形の方は今も四日市祭のみやげ物として祭礼のときに販売されている。

◆◆キャラクターとしての大入道◆◆

さて、この大入道の山車は、江戸時代の草双紙などに「見越し入道」の名前で登場する妖怪の姿そのままである。見越し入道は夜道にあらわれ、見上げれば見上げるほど背丈が伸びていくという妖怪で、「高入道」「高坊主」「次第高」「ノビアガリ」「ノリコシ」など地域によってさまざまな名称でよばれている。そして多くの場合、その正体は狸とされている。

だが、だんだんと背丈が伸びていく妖怪だった見越し入道は、草双紙のなかで首の長い入道姿の妖怪として描かれるようになる。背丈が伸びるという時間的経過を含んだ怪異が絵ではあらわしづら

く、それに代わって与えられたのが「首が長い」という一目でわかる特徴だったので、つまり、首が長い大入道は、伝承をそのままメデイアによって創られたのではなく、いわばメデイアによって創られた一種のキャラクターなのである。おそらく大入道の山車が作られた当時、こんな姿の妖怪が現実に存在するとは誰も思っていなかっただろう。それは祭りというイベントを盛り上げるための壮大な賑やかしだったに違いない。「想像界」ならぬ「創造界」の産物。造形化された妖怪について考える際には、この点に十分注意を払う必要があるのがある。



四日市祭の大入道山車（写真提供：四日市市）

新世紀ミュージアム

学術資料の収集、研究、成果の公開をおこなう博物館。知の空間である博物館は、大学という場を舞台とした場合、どのように活動を展開することができるのだろうか。大学の学術研究という財産を継承してきた大学博物館を紹介する。

台湾における大学博物館の嚆矢

台湾は一八九五年から五〇年間、日本の施政下にあった。統治機関であった台湾総督府は、一九二八年に植民地における高等教育機関として、七番目の帝大、文政学部と理農学部を擁する台北帝国大学を設立した。台北帝国大



国立台湾大学人類学博物館正面

学は後に国立台湾大学に引き継がれ、台湾の最高学府として優れた人材を輩出するとともに、学術研究を積み重ねている。

帝国大学時代から現在にいたるまで、台湾大学でおこなわれた研究に関する資料を大切に保管し、積み重ねられてきた学術研究の成果を広く一般に公開しているのが、「台大博物館群」と総称されている大学博物館である。物理学、地質学、昆虫学、農学、植物学、動物学、医学、アーカイブズといった自然科学を主体とした博物館や資料館が並ぶなかで、人文学の博物館として存在感を放っているのが、「人類学博物館」（以下台大人類博）である。大学博物館ではあるが、観覧は無料であり、知の空間は市民にも開かれている。

台大人類博の設立は一九二八年にさかのぼる。文政学部を構成する講座のひとつであった土俗・人種学講座の標本室と陳列室がその出発点となった。

人類学、民族学、考古学の研究と教育をおこなう場所に、学術資料の収集と研究、保管を実践するための施設を設けたことは慧眼のいたりである。

最初の民族誌コレクション

とはいえ、あらたにできた講座の標本室はもろろん空っぽであった。徐々にはり研究を進めていけばいいのだが、やはり研究の基盤となるコレクションはほしくなる。それを見越したのか、講座の初代の主任であった移川子之蔵教授は、講座の設立に先立ち、岩手県遠野をたずねた。遠野には当時、「台湾館」とよばれていた展示施設が存在し、伊能嘉矩（一八六七―一九二五）という人物が台湾で収集し日本にもち帰った資料が展示されていた。

伊能は遠野出身の歴史学者である。漢籍に通じるとともに、東京帝国大学で坪井正五郎の講義を聴講するなど、



伊能嘉矩 (1867-1925)

界大戦後に新製の国立台湾大学考古人類学系となり、標本室と陳列室、そして収集された学術資料もそのまま引き継がれていった。

二一世紀にはいり、台湾大学は大学博物館を充実させ、考古人類学系の標本室と陳列室はリニューアルし、台大人類博としてあらたなスタートをきった。日本統治時代から使われてきた陳列棚を活かした展示（上右写真）をおこない、一世紀に近い歴史の重みを感じさせてくれる。一方で、知の交流ともいうべきあらたな取り組みにも挑戦している。

二〇一五年、台大人類博の展示品で、四方に顔をもつ「佳平旧社金祿勒頭目家四面祖靈柱」とよばれるパイワン族の木彫祖先像（上左写真）が国宝の認定を受けた。現地集落の人びとと台大人類博はこれを機に、祖霊柱が女性の像だったことから、像を台大人類博に嫁入りさせることにし、合同で婚姻の儀礼をおこなった。両者はパイワン族の祖霊が結ぶあらたな関係をもつことになった。外に開こうとする大学博物館と博物館を信頼するソースコミュニティ、台湾原住民研究を志すものにとって、ちよっと自慢したくなる挿話の主役たちである。

人類学にも強い関心を抱いていた。柳田國男との親交もあり、日本の民俗についても造詣が深く、例えばオシラ信仰に関する本格的な論考をいち早く著したのも伊能である。

伊能は植民地統治がはじまってからすぐに渡台し、台湾全域を踏査した。オーストロネシア系先住民族や漢族化が進んだ平埔族の歴史人類学的な調査をおこない、『東京人類学会雑誌』等に数多くの論文を発表するとともに、現地で使用されていた衣服や生活用品、儀礼品の収集をおこなった。伊能は収集した資料の一部を東京帝国大学の人類学教室に寄贈したが、その大半は故郷の遠野にもち帰っていた。

移川は伊能の家族に台湾における学術研究の重要性をとき、あらたにできる大学の標本室への資料の寄贈を懇願した。果たして、伊能が台湾で収集した資料は蔵書とともにふたたび台湾の地を踏むことになり、台北帝国大学土俗・人種学講座の標本室、図書館に収蔵された。台湾にもどらなかつた資料は他の東大資料とともに、後に民博に寄託された。

新世紀の台大人類博

帝大土俗・人種学講座は、第二次世



佳平旧社金祿勒頭目家四面祖靈柱 (写真提供：国立台湾大学人類学博物館)



木製の標本ケースが歴史を感じさせる展示室 (写真提供：国立台湾大学人類学博物館)



「お前はモロヘイヤ好きで、俺はナダが好き。それだけだ」

相島 葉月
あいしま はつき
民博グローバル現象研究部

エジプトのエンターテインメント産業

「中東のハリウッド」とよばれる首都カイロの中心街では、ロードショーから単館ものまで数多くの映画が上映されている。映画やテレビ番組などのエンターテインメント産業は、エジプト経済を支える大切な柱のひとつである。映像や音響の技術が高く、サスペンス、ラブコメ、アクションなどコンテンツも豊富なことから、イスラエルを含む中東全域で人気を博している。

一方、欧米や日本の配給会社がエジプト映画を買い付けることは皆無に近い。筆者が知る限り、一九九八年に劇場公開された、エジプト映画界の巨匠ユースフ・シャヒーン監督の「炎のアンダルシア」が最後である。同作品は、カンヌ国際映画祭・第五〇回記念特別賞を



子ヤギのナダの活躍でヒッチハイクに成功。左がイブラヒム、右がアリー

受賞したことが、上映の決め手となったのだろう。中東研究では国際映画祭向けと国内で消費されるエジプト映画のギャップが指摘されてきた。国内市場は映画にエンターテインメント性を求めているのに対し、海外では「社会的に意義のある」作品が高く評価されるのである。例えば、二〇一一年二月にムバラク大統領を辞職に追い込んだ一月二五日革命を中心とした「アラブの春」を扱った作品は、エジプトでは敬遠されたり、検閲で規制されたりすることが多い一方で、欧米では注目を集める。「ヤギのアリーとイブラヒム」は、エンターテインメント性を追求しつつ、国内外での上映を視野に入れて制作された、新しいタイプの作品である。制作費を海外から獲得し、英語と仏語字幕付きで制作されたものの、二〇一七年三月に一月にわたりエジプトで劇場公開された。

若者の国、エジプト

本作品は、白く美しい子ヤギを「婚約者」と称するアリーと、耳鳴りに悩む天才ミュージシャンのイブラヒムを基点に展開するロードムービーである。近所に住んでいるながら接点がなかったアリーとイブラヒムは、魔術師が営む治療院で出会う。「三つの小石を三つの水域に投げ込めば呪いが解ける」とするアドバイスを若者の国、エジプト

トの若者を取り巻く非常を日常とする生活である。作中にしては登場するマイクロバスは、他に仕事のあてがない若者がつく仕事の代表格である。運転手には薬物常習者が多いという偏見から、アリーが大きなピンクのクマのぬいぐるみをもっていただけで、マイクロバスは検問にひっかかる。乱暴な運転に加え、車体が古いことから、交通事故の発生率も高い。シナイ半島に出かけたアリーとイブラヒムは、マイクロバスでの事故死を子ヤギの機転によって免れる。危険と隣り合わせであることは認識しているものの、庶民には他の交通手段がないのである。



東京上映会の際にシェリーフ・エル＝ベンダーリー監督と筆者で撮った一枚

「ヤギのアリーとイブラヒム」

原題：علي معزة وإبراهيم

2016年/エジプト・フランス・UAE・カタール/アラビア語、手話/98分

監督：シェリーフ・エル＝ベンダーリー

出演：アリー・スプヒー、アフマド・マグディーほか

日本では東京と大阪(本館)で2017年9月に上映

マイクロバスでシナイ半島に向かうシーン

従い、二人は子ヤギのナダを連れて、カイロからアレキサンドリア、シナイ半島へと旅に出る。

エジプトは人口の六〇パーセントが二九歳以下という若者の国である。彼らの悩みは就職と結婚。大学を卒業したものの、親のコネがないため仕事が見つからず、貯金がないため結婚できないといった、負のスパイラルに陥っている男性は多い。住居を用意する義務が新郎にあるため、余剰所得のある家庭では、息子が生まれたときから新居購入の準備を進める。筆者の知人は一六カ月分の給与を使った披露宴をおこなったが、「ジミ婚だね」と親戚に言われたと憤慨していた。

アリーとイブラヒムには、結婚資金を蓄えたり、仕事の世話をしてくれたりするような両親はいない。アリーの母は、子ヤギとの結婚を熱望し、幼馴染が運転するマイクロバス(乗り合いタクシー)の助手をする息子の将来が心配でならない。一方、イブラヒムは鼓膜をつんざく謎の音に悩まされる音楽家の家系に生まれ、自死を選んだ母と鼓膜を破った祖父の前に、自身の運命から逃れる方法を模索する。キャリアも恋人も音の攻撃によって失ったのだ。

ファンタジーと現実のあいだで

本作品は、ショートフィルムで実績を積んだ、シェリーフ・エル＝ベンダーリー監督初の長編作品である。彼は、子ヤギへの愛、黒魔術、耳鳴りなどは、シナリオを展開するために作り上げた「ファンタジー」であると強調する。

フィクション的な設定から垣間見えるのは、エジブ

あなたの名前はどこですか？



What's in a name?

福井 栄二郎

島根大学准教授

「あなたの名前は、どこですか？」

わたしがずっと調査しているヴァヌアツ・アネイチウム島で、時折、耳にした言い回しだ。だが調査当初は何のこともやらまつた理解ができなかった。訊かれた他の島民は「あの山を越えたところだ」とか「あの大きな岩の向こうだ」と具体的な場所を答えている。このやり取りの重要性がわかったのは、ずっと後のことである。

そもそもアネイチウム島の人はふたつの名前をもつ。ひとつは洗礼名(クリスチャンネーム)で西洋風の名前が付けられる。男の子だとジェームズやトーマス、女の子だとジェニファー、クリスティンなどだ。それとは別に、島独自の名前を彼らは有している。そしてこの現地語名が土地と結び付いているのである。

農耕民である彼らにとつて、食糧を生み出す土地は何よりの財産だ。彼らは土地に生まれ、土地を耕し、土地と共に生き、死ぬとまた土地へと還つてゆく。生活のよすがといつてもいい。だからこそ土地は、親族集団(ネテグロ)全体で所有するものであり、個人で所有することはできない。当然、売買も禁じられている。

親族集団の土地といつても広大なものなので、そのなかには小さな区画にわかれている。そしてこのそれぞれが、男性個人名と結び付いているとされる。例えばネイヨ(Neyo)という名前を与えられた男児は、その名前に対応した土地を所有することができる。同様にネムティア(Nemia)にはネムティアの、ニリヌプウト(Nirinu)にはニリヌプウトの、その名にちなんだ土地がある。つまり子どもに「名前を与える」ことは、そのまま「土地を与える」ことでもある。彼らが死ぬと、名前は親族集団へと返還され、また後世、別

の男児に付けられることになる(この点は女性名も同じだが、女性は土地を保有することができず、名前と土地の関連もないとされる)。

だから名前は、歴史のなかで何度も繰り返して使用されていることになる。誰かの名前は、決してオリジナルなものではなく、必ず前の世代で他の誰かが使っていたものだ。日本ならば、子どもが生まれる際、親はできるだけ「オンリーワン」なものを……と頭をひねるが、アネイチウムの人たちは、その点は心配しなくていい。だが、ある時間を区切ってみると、アネイチウムには、同じ名前の人がまつたくない(同じ名前の人がふたりいたら、同じ土地をふたりで所有することに なり、大変な事態となる)。そついつた意味では、全島民がみな「オンリーワン」だということもできる。

じつは一九世紀の半ばまで、島の人口は四〇〇〇人ほどだったとされる。島にはそれだけたくさんの名前があったのだらう。だがその後、数々の疫病で人口は激減し、二〇世紀の半ばには二〇〇人を切ってしまう(今は約九〇〇人にまで回復している)。だから現在「土地が不足する」ということはないのだが、大きな社会変容を経験してしまったがために「付けるべき名前を忘れてしまった」という問題が生じている。

結局、この名前と土地の話は、その後、わたし自身の博士論文のテーマになった。情報を集めようと島中を訊きまわっているときに、何度も尋ねられた事柄がある。

「で、お前がこの島にいるあいだ、お前の土地は誰が面倒をみるんだ？」
「土地なんてもつてないよ」というわたしの言葉の意味をどこまで理解したか。土地と共に生きる彼らにしてみれば、所在なげなわたしは半人前以下と映つただらう。

編集後記

本号の特集について編集部で話し合っているとき、映画「刑事ジョン・ブック 目撃者」へと話題が横滑りした。小生だけでなく、この映画からアーミッシュを知った人は少なからずいるのだなと意を強くした。ドラマチックな展開とアーミッシュを演じていた女優さんがえらく美人だったことは、こどもごころになんとなく覚えている。ところが恥ずかしながら、キルトが映画のなかで使われていたのかどうかまったく記憶にない。どこまで厳密に考証された作品なのかかわからないが、本号が連動している開催予定の本館の企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて—そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」を見てから、そのあたりを含めてあらためて映画も見直すよい機会になるかと考えている。(丹羽典生)

●表紙：アーミッシュ・キルトのベッドカバー

上：もっとも古いアーミッシュの居住地、ランカスター郡でよく用いられるセンター・ダイヤモンドパターンがほどこされている
(製作：1910～1930年代 [推定]、ペンシルヴェニア州。H0279281)
下：ドアの穴からウシがのぞいているようなイメージともいわれる、モンキーレンチのヴァリエーションで作られた子ども用ベッドカバー
(製作：1920年代、インディアナ州。H0269517)

次号の予告

特集

「モノに願いを」(仮)

みんなぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバース

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)

月刊みんなぱく 2018年6月号

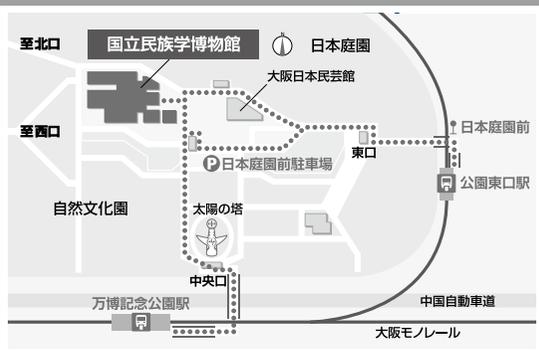
第42巻第6号通巻第489号 2018年6月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 丹羽典生(編集長) 寺村裕史 三島禎子
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一欒 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
印刷 毎日新聞社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

みんなぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんなぱくインスタグラム

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

みんなぱくYouTube

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

